

モンゴル帝国の強大化の理由を考古学から探る

研究者所属・職名：人文社会科学系・教授

ふりがな しらいし のりゆき

氏名：白石 典之

主な採択課題：

- [基盤研究\(A\)「モンゴル帝国成立基盤の解明を目指した考古学的研究」\(2015-2019\)](#)
- [基盤研究\(A\)「モンゴル帝国成立史の解明を目指した環境考古学的研究」\(2010-2015\)](#)
- [基盤研究\(A\)「モンゴル帝国興亡史の解明を目指した環境考古学的研究」\(2006-2009\)](#)

分野：考古学、アジア史

キーワード：モンゴル帝国、モンゴル高原、チンギス・カン、モンゴル考古学、アウラガ遺跡

課題

● 研究の背景・目的

13世紀、ユーラシアを席捲したモンゴル帝国は、その後の人類史に大きな影響を与えた。関税の簡略化、陸と海の交通網の整備などで東西世界を結びつけたことによって、モンゴル帝国の出現はグローバル化のプロローグとも評される。にもかかわらず、この国が如何にして成立したのかについては、よくわかっていない。それは文献史料が限られていることによる。そこで私たち研究チームでは、興隆の地のモンゴル高原に数多く残る遺跡や遺物といった考古資料に着目し、モンゴル帝国が強大化した背景を明らかにすることを目指している。

● 研究の手法

研究チームでは、従来の文献史料中心の研究ではうかがい知れなかった、衣食住といった生活の基盤、遊牧や農耕といった生業、軍事力の基礎になった鉄製武器生産や馬の育成などの技術、当時の気候や植生といった自然環境を、考古学者だけでなく自然科学者とも共同し、考古資料の理化学的分析をとおした実証的研究を実践している。



図1 研究チームの発掘風景

モンゴル帝国の強大化の理由を考古学から探る

研究成果

研究チームは、モンゴル高原東部のモンゴル国ヘンティー県にあるアウラガ遺跡とその周辺において、2001年からモンゴル科学アカデミー考古学研究所と共同で発掘調査をおこなっている。アウラガ遺跡はモンゴル帝国の初代君主チンギス・カンが本拠地を置いた場所（ヘルレン大オールド）だとわかっている。東西1200m、南北500m、東京ドーム13個分の広さの都市遺跡で、モンゴル帝国最初の「首都」だといつてよい。これまでに宮殿、工房、居館、霊廟などの遺構が検出できた。

現在、研究チームはアウラガ遺跡の南端に残り、一辺が30mを超える基壇を持つ遺跡内最大級の建物跡を発掘している。基壇には版築工法など中国系の技術が使われていたが、上屋は土葺き平屋根という西モンゴルや中央アジアにみられる構造であった。この建物には東西の文化が融合していた。年代はチンギス・カンが即位した13世紀初頭であった。出土品から集会所のような機能を持っていた建物だったと想定している。ここで外征決定などの政治的セレモニーがチンギス・カンによって執りおこなわれていたのかもしれない。モンゴル帝国成立期を知る上できわめて重要な遺構だと考える。

また、鉄製武器を製作した工房群の調査もおこなっている。アウラガ遺跡での鉄器製作は鍛冶工程だけに特化していた。中国（金、西夏）から運び込んだ規格的なインゴットから、無駄なく鉄鏃などを作っていた様子が明らかになった。このような効率的な武器製作が、モンゴル帝国の強大化を支えた一要因だったと考えている。

さらに、遺跡周辺の調査によって、天水を利用した雑穀農耕がおこなわれていたこともわかった。畝・溝の遺構とともにキビやコムギの炭化粒が出土している。雑穀がアウラガ住民の重要な食料であったとかがえる。農耕を可能にしたのは13世紀初頭の自然環境の好転だった。気候もモンゴル帝国の強大化を後押ししたようだ。



図2 アウラガ遺跡の建物跡の調査

今後の展望

アウラガ遺跡に隣接したゴルバンドブ遺跡やタウンハイラースト遺跡からは、アウラガ住民のものとみられる墓が見つかった。すでに研究チームではそれらの発掘に着手し、良好な人骨試料を得ている。人骨は放射性炭素を使った年代測定、炭素窒素安定同位体比による食性分析、ゲノム解析による出自系統の研究などをおこない、当時を物語る興味深い結果が得られ始めている。文献史料では決してわからなかったモンゴル帝国の興隆を支えた人々のフィジカルな側面が明らかになると期待している。



図3 墓の発掘